岡野貞一

小鮒釣りしかの川 兎 追いしかの山

忘れがたき故郷

夢は今もめぐりてゅめいま

恙 なしや友がき 如何にいます父母いか

思い出ずる故郷 雨に風につけてもあめかぜ

山は青き故郷

志をはたして

いつの日にか帰らん

三

水は清き故郷 ^{みず きよ ふるさと}

朧(おぼろ)月夜

高野辰之

岡野貞一

菜の花 畠 に な はなばたけ 入日薄れいりひうす

見わたす山の端 霞 ふかし

春風そよ吹く 夕月かかりてゆうづき 匂い淡し 空を見れば

里わの火影も

田中の小路をたなか、こみち たどる人も

蛙の鳴くねもかわずな 鐘の音も

さながら 霞める 朧月夜

森の色も

渓の流れに散り浮く紅葉

波にゆられて離れて寄って

水の上にも織る錦

紅葉(もみじ)

高野辰之

作曲 岡野貞一

秋の夕日に照る山紅葉あきゅうひっていたまもみじ

松を色どる 楓 や蔦はまつ いろ かえで った

濃いも薄いも数ある中に

山のふもとの裾模様

赤や黄色の色様々にあか、きいろいろさまざま

荒城(こうじょう)の月

作詞 武島羽衣

作曲 瀧廉太郎

春高楼の花の宴

巡る 盃 千代の松が枝わけ出でし かげさして

昔の光いまいずこ

眺めを何に喩うべきながない。

櫂のしずくも花と散る

のぼりくだりの船人が

春のうららの隅田川

秋陣営の霜の色

見ずやあけぼの露浴びて

鳴きゆく雁の数見せてなりかりかずみ

昔の光いまいずこ 植うる剣に照りそいし

見ずや夕ぐれ手をのべて

われにもの言う桜木を

われさしまねく青柳をあれるしまねく青柳を

三

 \equiv

錦織りなす長堤に

いま荒城の夜半の月

垣に残るはただ葛

替らぬ光 誰がためぞ

げに一刻も千金の

眺めを何に喩うべきながないたと

暮るればのぼるおぼろ月

松に歌うはただ嵐

作曲 作詞

瀧廉太郎 土井晩翠

天上影は替らねど

栄枯は移る世の姿 嗚呼荒城の夜半の月 写さんとてか今もなお

兀